仏説古今抄

拾遺十箇條

目録

仏教図書

ヘ 5
1864
4

他諸古しと称差之中

再校スル十箇條序

蓮二かくらけぬりね今子拾遺十箇條ハ
むし祖翁の口誡をはぶかりて永く物子庵の
秘稿とおもしろ祖翁の滅後之十年ようて
ひろく白毫抜子論をあつまりて近く我門の
衆評をそなへ遠く天下此衆議を窺ふ
歟く有あれい疑しなかれ有ん人ハ
拾ふ人をまくあるを祖翁の接続めるる

蓮二之方

此諸の錄ものせたくるかねあるに一書されいもと子
真享式と春秋と一字ものせ襲貶をぬくるに人と
書醒書醉あんとけて千箇條と左傳の耳と
かくもけて一冊を知の釈文あるへ例と二字を原
をるものあるて百世をけんの鑑あんとせけねと
は一冊を同様と今の凡例を加して我子はおの
中巻とをあをり例と祖義の口誠とおそれ例
と先師のを他とおそるんやをる人もけ序と

享保に酉六月中浣　照孝

十箇條用錄　並凡例

古法に可有取捨事

▲杜鵑▲沖見竹▲柳▲櫻▲萱▲蛍▲杜若▲芭蕉▲蝸牛▲鶺鴒（此十品ハ象物ノ数量ナリ　右ハ三品類ヲ音訓ニ替ナリ異名ニ呼テハ之ヒ四ヒ免タレト今ノ他諸ノ式目ニ座ニ品ト定メリ古今ノ取捨トハ此謂ナリ　右ハ十品ノ名目ヲ筆テ万物万象ノ凡例ト成セルナリ但シ柳櫻萱蛍ノ四品ハ花鳥ノ段ニ収文アリ異名異躰ノ差別ハ首巻ノ凡例ニアリ）

去嫌に可有斟酌事

△父母△男女（此四只ハ人偏ノ凡例ナリ）（此類ハ二句ヲ去キナリ）△主△誰△身

△独△媒（此五只ハ人偏ノ例ナリ人偏ト定テ指合ヲ繰ルヘカラス）△僧△寺（此二只ハ古式二人偏ニ非ス居不ニ非スト）△親王皇女△天童天女

云ヒ今式ニハ指合ヲ繰ヘキナリ）

△帝御門△仙洞新院△鬼仰（此十只ハ古式ニ色々ノ説アレ共人偏ニハ

二句ヲ去キナリ御門）

ハ居不ニ二句去キナリ）△若菜△郭公△松虫△水仙

△水鶏△三月月△尾上（此七只ハ會意ノ名目ニテ決シテ二ハ有カラストナリ會意トハ

二字三字ノ意ヲ會テ其名ヲ作ル故ナリ字ヲ造レル六書ノ一名ナリ）△雪△雨（古式ニ此二只ハ雪四雨ニト

アレ共名類ナレハ）△虫△魚馬車△飯餅茶酒（此八只ハ各自

雨モ四アルヘシ）

ハ日用ノ物ナレハ一座ニ）△杖子（此四只ハ有キナリ）△月日更科△花草野

二句ヲハ有キナリ

（此三只ハ連歌ノ作法ニテ俳諧ノ家ニ論ナシ）△鐘子鉄炉（カナ）△爪木妻

△歌（ナケキ）木△篠（サ）竹△依々四維△四季廉の草△水追

△山伏△山類夜分（此七只ハ古式ノ嫌物ナリト今式ニハ此ノ法ナシ）△胸仰

△筵△火△轉寝△眠子△起子△虫石（此八只ハ古式ニ夜分ト定レ共今式ニハ夜分ノ意ニテ指合ヲ繰ヘカラス）△冠子烏帽子△綿子木棉

△夕立雲△雨雪△霞月△特（此五只ハ古式ニ附句ヲ嫌ハスト有レト今式ニハ

嫌ヘシ總テハ古今ノ違ナリ）△孤生△師走（此二只ハ古式ニモ異名ノ月ハ附ヘシ

トウ打越ヲ嫌フハ好シ古今ノ通式）

△山降△風光（此四只ハ凡例ナリ總テ天象地形ヨリ能藝雇

使ニ至ル三テ子類ヲ以テ例トス一理万通ノ故ナリ）

指合可有分別事

○連（トテ）○而（シテ）（此二只ハ手余彼ノ法ナリ本文ニ分別スヘシ）○社多ヨリ○比多ヨリ

○木ノ葉ノ○下葉ノ（此四只ハ古式ニハ大夏ト○之字假名アレドモ今式ニハ子細ナシ）○五字假名（此二只ハ古式ノ名同ナリ○老○親子（此二只ヲ古式ニハ述懷ト成セリ今式ニハ此等ノ名ナシ）○鳴子○綱○花鳥繪○花ノ櫻ニハ分別スベキ支トフ○楓ノ紅葉（此五品ハ古式ト今式トニ去嫌ノ遠同ヲ云ヘリ其下ニ考ヘ知ベキナリ）

千句ニ有ル一物ノ事

●鬼●虎●龍●女（此四只ハ連俳ノ差別ナリ新式ノ一座一句ト云フ所ニハ五十余名アレドモ多ハ連歌ノ用ニシテ俳ト誹ト不用ナリ去レドモ此四只ハ俳諧ニハ不用ナリ去レドモ此四只ハ俳諧ニ敵シテ俳ト誹トノ差別ヲ云ヘリ今式ニハ異躰ノ数ヲ定ス

花鳥ニ有ル二物ノ事

柳櫻風厚風無風草風菓千鳥（此七只ハ古式ヨリ一座一句ノ物ナレドモ花鳥ノ二只ハ四花八月ノ貴散ニ效ヒテ一座三句ヲ有キトナリ花鳥ノ名ハ代々ニ考ヘシ）冬牡丹冬椿冬梅紅梅緋桃梅櫻紅葉山吹郭公（此八只ハ花鳥ノ中ニモ只一句ニテ二句ハ有ニシキ物ノ凡例ナリ此段ノ詮用ハ二句有テ異躰ハ只ニテ二句有ニシキ同躰ハ二ト成セル二句一意ノ用ヲ知ベキナリ）

日用可軽物ノ事

○昔曉○庭垣○袖襟○湯汁○文使（此十只ハ天象地形ヨリ咲ル賊食服等ノ凡例ナリ此類ハ總テ躰用ノ軽重ヲ知ベシ）○涙笑○照曇○植刈○眠覚○起居（此十品ハ能ク子ノ凡例ニシテ面ヲ替テハ七モ八モ有ベシ）○同異○耳口○手足（此六品ハ支躰ノ躰ナレドモ平話ノ用多ケレバ折ヲ替テ四五モ有ベシ）

左可不審ニ接ぐ事

老福神親子 此二品ハ不審ノ理屈より平意ハ古式ヲ捨テ今式ヲ取レトナリ 稲妻

電光 鶯 橋 龍 氏 雷 此五品モ前ノ例ナリ古式ニハ嫌ハ又物ヲ今式ニハ嫌ヘル

接ノ不審トハ此等ノ謂ナリ 青柳 芙蓉 櫻人 此二品ハ式用ノ相違ヲ去嫌ハ二例タラ

洞 露 洞 雨 書 机 樫 鳥 此四品モ相違ナリ 都鳥 用ヒ所ハ其下ニ考ヘシ

冷子 此二品ハ学文ノ媚ト学文ノ向遠ナリ此二品ヲ以テ連俳ノ用無用ト式ノ損益トヲ知ヘキナリ

曾テ不及論ニ物ぐ事

▲雪ヲ霰散 ▲椿ヲ花 ▲蓮ヲ実 此三品ハ佛傘ヲ雖トモ今式ニハ不用ヲ云ヘリ

▲朽木ノ穀文 ▲弓流類説 ▲鳥紙取成 此三品ハ古風ノ附合意附トスイ取成ト云ハ其比ノ設ナリ今ノ作諧ノ不用ナカラ此等ニ古式ト今式トノ各別ヲ知レトナリ

文字穿鑿ノ事

○影陰 ○世成 ○場庭 此六品ハ古今ノ常談ナリ然レトモ訓シテ例ノ一字一用タルヘキナリ ○鳥ニホ ○滝タキ ○詠ヨビ ○齢トシ 此四品ハ十條一郡ノ意地ナリ詮用ハ其文ノ下見ルヘシ字意ハ和漢ノ通用ヲ知レメン為ナリ

家々秘傳ノ事

去れ秋去れ久方暮 此二品ハ佛傘ノ文法ニ傳授ノ自讃ヲ難セシナリ

此等ニ連俳ノ用トハ　鴨長明　都鳥朝角　無四季モ例ノ
無用トヲ知ベシ　雖向ヒ繦テ
俳傘ニハ新式ヲ妄言タリ毀タリ早竟ハ自己ノ傳授ヲ曠
ル古風ノ抄者ノ筆法ナリ此故ニ今ノ俳諧ニハ人ヲ毀ルニ手ヲ
置サル例ノ虛実　○稲負鳥　○百千鳥　○嗚子鳥
ヲ察スベキナリ　○郭公鳥ハ歌道ノ傳授ニテ俳諧ノ式目ニハ不用ナレト
此ハ鳥ハ歌道ノ傳授ニテ或ハ除メ或ハ後メ自己ノ
俳傘ノ文法ニハ鳥ヲ称ハ此ハ一段ノ詮用
知識ヲ師ントスル自讃ノ姑風ヲ笑ハルナリ然ハ一段ノ詮用
ハ文字言語ノ用ニ非ス假令ハ中古ノ誹諧ニ敵ヒテ
此十條ノ意地ヲ立ル二言一方當ノ秘訓ト云イ一刀
兩斷ノ法語ト云ハル文ノ虛実ヲ看破スベシ

古今抄序目終

拾遺十箇條　月之部

一理万通ノ序　東花坊

今ハ拾遺十箇條ハ貞享の末比より元禄
の癸酉ノ年に湘南ノ門人ふかれ武江ノ隠
て故義の夜話を紳ノ為ニ書してかく十條の
極目をもしるしをしゆるされをなを
狐子庵の遺稿ノ中ノ五秘の一帖とも
きるもこれいうもとも有れハ此の世言ねも
貞徳の俳傘ノ中ノ庵ノ中ノ應安の新式より

もれい中古の誹諧ともく時を連歌の式目と
いふよりは似て失火より池面の猥ヲ(ワイ)おそるゝ為
ものをれとも石の奥廉をひゝきゝ行人の名
よりて滅れの撰集よりもるとゝれをかくて
遺稿のかゝし果てきよあれい彼ふ中論よ
衆評とゆあらもけりよ中像よ衆議とゝ会せ
て物よ二十年の変ときゝハ波下の褒貶よ
耳とをとゝもてこと世を人よきをゝて例よ
達行めこと地と忘ゝ事を弾よおそる一きをけ事也

寶永辛卯之月日

拾遺十箇條

○古法可(キ)有(ル)取捨事

中古よ誹諧の法式を連歌に一ある物へ俳諧よ
いニとゝ可ゝある物をゆとゝ可ゝ六ある物をハと
ゝ可ゝ七ある物をゆるゝ折と嫌ハ
面よゆりて物をと連俳の差ゆとゝ可ゝをれと
おをれゝをゝ俳とゝ可ゝあをれゝ俳ゝ一をゝ二ゝ可ゝあをれと
よゝ石ゝをゝをゝらゝくゝをゝ人ゝ加ゝ一ゝ合選をるよ
去嫌ゝをゝ先ゝを天象地形より草木を歌也

蔡賦食服も用ゐきちゐ耳ゝひく抱てん信
ゝきと云ふある〳〵それいきとゝひ人の制をゝて云
我と用抜をきる〳〵きも也指合とゝを倍法の抜よ
あれいゝ余波めかゝあり〳〵てあ〳〵ん〻俳諧
てゝ我ときる〳〵きゝ〳〵八連音と俳諧ゝ伝す
の式ゝ少ゝを也ゝ伝ゝもの代ゝ和ゝをゝあ〳〵ん俳諧
と俳諧の連用をゝ也我もく中ちの俳諧より
合ねの場減きるをゝを和訓のゝをゝきゝを▲杜鵑
とゝひ同音語の牡丹を▲ぬゝ〳〵牡とゝふをゝて連音
い和訓のゝあれゝも俳諧を音訓の二とゝるゝ伝ゝを

和漢のきゝひゝゝ〳〵音訓ゝを一名也おゝ一法の
百韵ゝおゝ〻物合の二也ゝん今は俳諧の世代より
論をい学文の媚は不様物とゝふ〳〵伝ゝを今は
俳諧ゝ〻古法の名目とゝむ〳〵くゝをゝゝひ牡丹の
花物ゝ或を蹈波のゝゝんとゝひ或をゝさ餅とゝふ
時を折をゝゝり面を形ゝてゝみゝもゝるゝを〳〵れ
ゝ蹈波の牡丹をゝゝゝ〳〵くゝと俗小姓の方ぬりとゝひ
餅の牡丹をあゝくゝとおゝを銭の膝くゝとゝふ俳諧
い例の法ゝより〻〻て抜ゝ和の牡丹ゝあゝをゝを
是名ゝ是非ゝを古今の差ゝふゝとゝゝくゝを也

ちりとゆかしの雅式まことに婦ふいこの雅屋
にて秋代と代なを字のそうやせかくを姿性の
きをひとり千式をひ万代といひ用る木代おあれい
捨る方しおあん代をしや古代の取捨とつふを
四式をを▲柳只一▲櫻只一そして春柳とひ遅櫻と
いひ或を秋冬の詞をもまをひてこある一と宣
られを雅諧をを柳行とひ梅朝といひ移て例
のはしゆりられを春をを柳し遅梅も二名
一雅の物あれい今代雅諧をを只一といふむ柳笑と
いひ柳国とつを美雅を例めまをちくをを年

多歟も食服も皆くをを例ををまを▲萱只一
▲蛍只一四式をかくのををく一座百と宣られを
雅諧を例の青訓も及ぶを蛍くと百ある一
とを何方を蛍代百るあるや移蛍いをを雅あり
とをり中方をけれめまを多あれい一色くをを性
ををあを一雅方通のはふうん妻を萱の初あを
まれんより方を方をかるをかいこれをいを名
とををに蛍くとを百るしあんうをうい移蛍
をを秋をを方を蛍くと百ある一一今をけ
六界を元例をを方をしあむ百を

▲杜若▲芭蕉あり古代よりこれを一あり或い音訓
の二とあり或い載入めることあるをれと二字ようてよれ
名用をおのおのもれあり用とあり かくれい▲蝸牛と
いひ▲鶺鴒とよまれを音訓ともに只一とよむ
あり 狂選するに和哥連歌ともに載入しいひけ
し句と作るはあれいも家ともはいん連哥と
ふるとつい俳諧ともに恥とかきはをそいあり
とはあるを猿ゝ為て連哥はあるはとる
と俳諧笑を称字のはあり雅俗のやと
を才一の誠也遠くし今は俳諧ともに八月は

はのふ同をふ名の象ある物を豆腐とおと
ふひ猿をとふをとふ見聞と姿のかりるい
一流をに只一ゝて見ゆ之姿のかりるいことを
をとつを字をとうあを例のるゝ也
名用の表景を一流の模変ゝて古代のを称
いを謂あれい百卉千名ゝをに知べきを

○去嫌可有歌事

むゝは俳諧と今は俳諧も打続の論のはあるを
姿指の二はもれさるなを中ゝ人倫のを

へさとしの面ゆりは吹とてあるゆゑにさとし
より百歩を百日あるへし人倫あるへしとて
なほり人倫と言ちとしをそうに起兵之ゆの詞
と仕けて人のさ倫をおはき苦あれい△父母といひ
△男女とつひ月をちち耳をちうるみのかい或を
自他のさうひとうちち或い姿性のさういを考へて
打越の所んとつおふ〳〵へ人倫の詞を似かうとも
一をのそうを書〳〵やをうにをうい古おを拾る
△之△誰△身△独△媒とつおれを書人倫の詞
て人倫とを宣〳〵をとこれ〳〵をは制の実猛と

おをを之ゆ所をや古式の実かををおい△誰何とつ
打越て人倫と婚ふをを例のつふをとをを△僧ハ
人倫とあ〳〵ををを例のつ現所をて一色くをを
はをを百式を百不を今つおを〳〵まをや△僧の打越
て人倫い去〳〵△寺の打越を兵不い婚〳〵ををに
△親王△皇女のをとをを△天童ををひ△王女とつ
をも何の部を入てはをを〳〵まをや△帝を人倫を言
去〳〵△僧門を兵不を言はる〳〵はれを△仙洞
△新院のれを人倫を兵不を兵不をを〳〵むは
をは式をも部れを宣をれ〳〵れを△僧を△鬼北

打越らせたまひし人倫あるべきもの也抽てて古今北堂ひとつをたおめりる
△ふ門家△郭公△松風△水仙のれを音訓さかりり
吳名ゝしてて一冊ゝ二てあるれも今の俗語の
設ゝ二てゝの會ゝとりて名とあるを抽を決して
只一ゝ人ゝ筆也況や俗筆の△水鶏の式ゝ連音
ゝを只一あれと跳潛ゝ上下ゝかりて二あるへ
とりゝゝ語源の指合とゝはゝれ上下のゝり
いあるへゝれゝをゝひゝゝゝゝゝゝゝゝて
△三日月と二てあるれとはゝに二ゝの會ゝ

決して只一あるへし△尾△とゝ二とありて連音
詞ゝ多用あるゝゝと俗語ゝ只一あんゝゝまよく
豊節の艶詞ゝ用へし一ゝの名用ゝ△雪を
也ありて△雨を二てあれと雪ゝ雨ゝりて用おは
あゝさゝゝかりて△六也ゝあるへゝ也或を
△雲△風△馬△車のゝゝゝ△飯△餅△茶△酒のれ
いゝゝ名とゝゝゝに二ゝあるへし△木魚△飯鏡
のゝゝゝ吳名ゝてりゝゝ二ゝゝゝゝゝを
△肴魚△菓餅のゝゝゝ吳音ゝひてゝ例の
和号ゝと宣へゝゝゝなりゝゝゝ象物ゝ日用ゝ

れとはいくさまれと言ふ八ふの合とあけて一条とせて
百物とあらしめ一言とあて万語とたゝえ条たけ
例とあふて一きもいてゝ古式の婦人おもい△おもふ此
大論より△月と文粋を附白とき〳〵して△芸神を
を附白とき〳〵てたれと論を今の用ふたのもて
△錦をもむてふ詞を全く連ゆ此用ふて我家ま
いけ詞ふあ〳〵されと洮潛の秋文ふ△女の鍬(カヽ)者と
き〳〵ひ△大工の規矩(スミカネ)と婦人これ〳〵八何ねふ論ふ
及ふて或を△瓜木と妻とき〳〵ひ△鍬(ナケキ)と木のはたい
連ゆ此用ふ〳〵と△連ひと向ひを洮潛の浸瓦(ヲヤリ)

あん或を△篠と佐々羅と婦人答此はたうとふ
へられと△羽蓋簾の蓋と水也とき〳〵ふい何ねふ
と折号ふ〳〵かふて況や△山伏と五ふを婦人
いうとはふひ字とふ〳〵あ百世の人とあやうふて
よ〳〵或を△扇仙とおの分とふ〳〵△遠とおら
とあ〳〵△火とおの分とあふて△鶏雲八句論ふて
△起ふし△海ふふむしおの分と婦ふるれ〳〵ふて
浴と論ふて拾め理屋とふるあんきふ△屯△作
のあふ大むふをおの分ふきふ〳〵ふ実ふおの
浴ふ信あれい歩越めふふひふんとはく〳〵おの分

の指合とゝ定へうるもけ例と制なの場梅とてふ
命しゝてや古式の嫌ハねはもゝ冠ゝ名用ゝと
はけ△綿ゝ本梅とはけ△ゝ定ゝもゝ嫌ね
い△ゝ名ゝ笠ゝもゝ△ゝ名に特ゝもゝ論ゝれハ二名
一ゝとあれゝもけまれゝもゝ名ゝ附ゝ名ゝ嫌ゝ名れゝ
へ今の俗語ゝ全く用の法あれゝとゝもゝ
けゝ名ゝもゝ用の名例ゝもゝ名ゝ余ハ
皆く等ゝに及ゝもけゝれゝゝ大むゝの法ゝもゝ
△法ゝもゝ△作走ゝもけゝ名ゝれゝ名名の名ゝ
附へ一お紙ゝ嫌ゝゝ古今の指ゝ称ゝへ

但ゝ法ゝもゝ用ゝもけ附ゝきゝゝ法ゝ知命
古今の新敵ゝゝ連ゝ二ゝあるゝもゝ俗語ゝ
い只一ゝゝ連ゝゝ只一ゝ制ゝ梅ゝ俗語ゝ
ゝ三ゝゝもけ俗語ゝ用の法ゝ一社
の人和ゝあつゝ折ゝ馬の新麻ゝ法ゝ
半ありゝもゝの時ゝ法ゝ一ゝ
連俗の用ゝ用ゝ用ゝ法ゝ俗ゝ家ゝ用あれ
ゝゝけゝ法ゝ用ありゝけゝ変通自在あん
ゝゝもけるゝ字ゝゝけゝあゝゝゝ△心法ゝ家
ゝきゝ△作走ゝ秋故ゝ嫌ゝゝゝ一社の年

いとまなくてかくりて世代の宮とやいふ人の見聞まねるまねぶ童
まるまむ人の見聞まねるまねぶ童
名れとも近くゆゝしく人の言語まねぬまねぶ童
し遠く嫌ふ事なしいふ山をいふ山を
一説に二あり△風をいふの字をあれとも△峯を
二あり△風をいふの字をあれとも△峯を
ゝ二あり△風をいふの字をあれとも△峯を
く〳〵△峯をいふ△峯をいふ△朝(ツレカセ)とも同じ事なり耳まひく
地をいふ一説に字れ代の場減をなあれとも今の
世俗を峯(ケワヲ)一知(ツル)方(ッカ)とする敏捷の事を字
をれ〳〵の差ふ事敢あんらたに〳〵山を

いふ事ハ△峯也△嶺也△嶺也△論して△説也△谷
也いふ事△一説に△れいハ△海也△山の對して△沖也
△磯也△川也△沢也△峯をいふ事なるべしいふ山と
峯と也ハ嫌ハ二十余字のちがひあるて百姓の
海をいふ説也也ハ也ハ也ハ也ハ也ハ也ハ
百姓の俗語に二十余字のちがひあるて百姓の
より屋押復用中て十二所の字類とハ一字を
あ中て百字の例とあるハ何のあるをいふあるを
やまとハ一説十知也一説方通也て一へ〳〵
ゆゝしき説を連俗と称を称をあるこ方

又千字文を節して百代の一社とたてまむとされ
い一社の衆語をかくのごとく一世の衆議と家子
へく百世の明堂とやらん（きもを章句合し
去嫌も今の俗語に論ずる時をよのたれの此と
対あるとて言葉部に云男女をゆるして他の猪の
とかるれくるもしーを不改のあらんい男女をゆる
一俗語をもーを百代の一社の作はと
○指合可有分別事
御筆に一説くに世に言ふと紙をもれ中に

世に言ふとの○迚のてを指合にてとりもれい御筆
に○而のこをあげてのさに指合ありと
それとそもも例の有をあるとて偏へ不此味
とて一字に二言あれい字中の詞にてのそれに
指合にて而を爲而の訓異あれい字に二言
にて指合あらん今もて世に言の訓なるを
花とそんそて世の字と語をい花とそむと
て世異あるい與而の二字にて一をむかより
而字もての訓ふる爲斯而の異あれい物

て大和の詞なる者のごとき訓點をわけしこそといひ
歌人も連歌師も假名と真名とに通せされは
不案内なるのをおほつかなけ詞をよせに大事とも
ちらひ第三の哇なるしき用あれは御傘をは
てかくのごとし指合はされと輕くれは一卷
の宗匠に彼かせておよろさして見るもいふ是を
附合の作者の害にあらねはせよらを逃を
每用にして寛制の自在とてふへきさや○社好り
は大事にてさるも上下にかゝりてまた二句
と定られし何故なるやと人かならて一○此ならり

とは扣そして連歌にも折に一度して俳式にも面をかへと
擇ふとあれとも只に耳なきれ詞あれは俳諧
の一卷にも折をも定めて上下にかゝりてまたして二も
まへきてや或は下せるの○かなりてなりも
千句にも只一とを賦さして何の為ちらやけむの
まに遠境にも見なり見なりぬの穿鑿あれと
公界にもおとなふ人の知やりてもやりくーともなね
なりそいりね皆やちにまろ和歌連歌を卑下して
人の詞にもひふれと俳諧を俗談平話として
なす事ふ孫も我とまりてなりねなり其いやねや

中にも古式の覚かくさんハ○三字仮名より五字仮名
のあれハもなりまして今よし俳諧ハ俳諧のお語
あるに一定くに指をおる事や是らの名目も
論に及ばずを述るに○老を述懐とも人間の私
て今や談笑の和よりハ老も絶てまき卿に
入て敬尊養老とよる聖経の詞もきく八
さらん偽して○親子を述懐とも去らく尊ね
をつきまよへる是らハ分けかずや似せ
物して古おの道辞による所よる事とある
おほしきかハ白いをつまいといひ親をききまし

子を捨んし孝悌も所よる事しやきとひにて
いよへくとし筆まいふむましき法なきあるとや
或も○鳴子も稲をやうちねに挂ねさる者とや
いろあるさのをさひてら是らも分ておよびなを
して生れまよる者一し○桐に重ぬるを三句
例也或も○草木るる獣の縁よそを多くを捨
あるう生れ挂ねにハ嫌ひまて見やきを定て雑と
あうさん論あるん事を捨ハ云ふ法くはる事よきや
是らハ○猶の月○喩の花の例也哀を千式
万代の一ツ十知といよへきや況や風雅の貴貌

と書り花紅葉の二字を○桜と花八面を作り
て桜く○枫と紅葉を折と嬬ひて言葉を
二字の差あるやもとこれ事の艶といひ紅葉
いこ秋の色をとひて桜と枫をも雅也也と
紅葉を主用せけ名ねこ也を桜とあるとて桜
とあるこもなりとこれ我門のふを論ある
とや言こ論をこ桜も枫也とあ紅葉こ面と
ばりて出一あるへきこやこ雅を例此歌を
ここやこてばれこ桜の二字をこるるを
後の歌るの論こ今選まるに太

の二條を指今を何の名あるや古嬬を何の名
やこ百代の名あるもこ例の此式新敵
をこく例の古和こ合ふをこ一かくめをくかく
めこきこを皆くかこ歌の桜記あるも

○千句有一物こく事

おもも連歌の古式こり●鬼●虎●龍●女こ子れ
八千句こも出一あれ八百新こ歌こ桜きこ歌の虎
のこ耳月こあれよこ鬼味噌こ鬼法女こ子
へ俳諧の家此常詠こ海て女こ女虎こ

つゝをれくゝの間あるに連哥の艶美うた
ばかりあん俳諧うた何のねあるや女と男の對る
まゝ女を千首と二首男を百首ゝこあれゝ
おゝて此れのちらひあゝん皆きて人理の私すて
人もち人をうゝつゝとゝつゝ重種のうゝあもはる
あり又やはり傘の歌文と思て花物(ケヤトキ)あるゝ
女を俗ゝゆゆ和歌連哥ゝいむ和
ゝ俳諧をゝらおゝてゝわさゝいやゝさ詞
をゝのゝ花物とむれとまるゝ秋と秋宮北
諧歌とゝひゝて船氏馬士の鄙謡ゝあゝゝ

憂名を八花物ありて又ゝ今の俳諧
ゝて男女のこゝゝしゝ音訓ゝかゝゝゝあゝく
見所を例のねとはゝゝあゝて手るの未はは例ゝ
まゝ一一今選まゝれ連哥北用を中ふゝの人を
ゝゝあゝ花るの艶詞ゝ風性をはけて殿上の遊
の優美とあゝゝ花今北俳諧の用とゝふゝ中不
北宮ととゝゝ情(ミヲウ)婚姻の事詞ゝ風雅とはをて世
ゝ詠笑の和とまゝむされゝ連哥も俳諧ゝ
雅言のねゝとゝひ俗語のゝゝゝいゝちは
言語の病あれゝゝれの連哥ゝ花物と好む

いつれの俳諧ゝ鄙詞とかつてあむ詞ゐにて集
の作者ゝとゝ不審ゝ俗や公任卿信のときき
和漢通達の哥仙達も俳諧の所ゝ也あらひ
いこれ〳〵のこひきゝやとあやしけるそも
秋十條の道ゝくもおそる一きゝたかく走門
のこと地ゝ所のれい和歌をいろひ連哥とゝ
此俳諧とあるゝ作れしに不孤起とゝ
大道の法文ゝ所の故きゝとゝきれゝ式の
新きゝとゝきんゝきれいゝを是ゝひゝをれを
非ゝいかゝしゝきゝかくゝ作ゝの人ゝ彼ゝ秋

とあゝむくゝも秋ゝ彼とゝくゝ秋ゝ
美ゝ春秋の釘語とおの〳〵秋とゝるものゝ
十條ゝて秋と罪ゝるものゝ十條ゝん
初ゝ和ゝ二秋の道ゝて〳〵れ故ゝの美前ゝ
ゝ言とゝひて一ゝ〳〵再選の功とゝきんゝ
一世の謙ゝ〳〵きゝ今此十條ゝて一秋の法ゝ
〳〵きゝ〳〵一法あり

○ 花鳥ニ有二物ゝ事

四式ゝ竹木ゝ熟のれいおもれゝ一ゝて言訓

まかりて天石さしてあり立てあれと
今の俳諧の姿なれとも論をへ言も訓もかて
もてもてもとにあるてて二まを用る
花をある一一さとへいの柳櫻のときまを
柳のやうにさとへ秋て一まをのおとろへてゆる
むの景落をおとろへまきうて桜ちまちれと
冬かるけれいもをとちにむ北二なを
いよへきやをしの周しの燃のときて来るも
帰らもそるもさとへいの草の只一ちうしまと
うもを哀乐をを冬月の石形をお

まちんやうのるもてをてもふ北北るも第
ひまあてを二まのおおのうんまれと今ふむる
いはまを七月の石とあげて一物二用の凡例と
あるこはのおるを付くく勧よへも毛今選
まるにはを式ををこひ百る百むをいとるを
おはれまれあれんむもうを二まの石用
おれ一をとへいの百冬の牡丹ち冬植冬物の
れを同石異形のおあれへ今の二用のことうを
二あるまを石形あ一寄を論をへ異形のおを
ををひ同石七二をとへまを今を同石同形のお

と一流と二あり一しとゝる古今此事とおもふて
てゝ色まして紅梅といひ緋桃といひ櫻のおもて
とゝふとも法にて二とあるべうもとゝ余の竹木も
此例さるべうまる色ゆゑ式の詞をるゝ柳を
ちよれとゝもちるとかゝ之樹をおとゝ法ふれと
かゝる時とゝるとゝ梅況や草の盛衰より厚も
無もあるべこゝとまこゝ四季のうつり新れさへ
凡雅を例のさひしとより悲哀哀乐の変とゝれ
とゝ色ゝとゝへゝ名とゝもゝにて一流二角此流
あれい一流と二とゝ沒百一之の例と

ゝる一一体と三季のゆゝ及ゝ梅況と草の部に
ゝふれを考て此論の紛れおゝしたりおゝ
二角の例とゝて花況とひ実とるとひ生る
ゝとひ花やゝとひて百ゝ百むと二角とおゝさへ
四季の名目をかゝしおゝむたて此式のゝと
つゝを例と凡雅の意旋より花ゝるの二ゝおゝ
月雪此ゝ号と一流れゝんゝるゝとゝ知の
例とゝて一一ゝたゝとゝ花ゝるの二名ゝゝ
つゝり四季とゝるゝゝあれとゝ名とゝ
用ゝゝ地を二季と二角のゝゝると知べ一ゝ

論ずれば一時に今の新制製作なれば例なくそれを破れるもまた法を破るなり古今の制語とそのもとづくべき例のなきをえらびて二社の冥慮ハいかゝなるべき一世の冥議を窺ふべく百世此四位を法とすべきものなるかくのごとくかくのごとくなるべし

○日用可(キ)転物(シヌ)なる事

古物語○昔○曉のれより○庭○垣○袖○襟の
ごとき○湯○けのごとき字をおくこと一二三

あれども昔と古今の字例とまちまちなり曉と明
暮の字例とあらふ一一例よりまれに一度用ひ時
あるもむしろ字例とあらふ○文も○仮も訓義ことなる
かむつかうまけれとまちまち折とかなまじりに新
字もある一一むかしと連歌の式目と態(ワザ)字とまち
まちなるべきあれと○法○笑○照○雲
○植物のごとき○霞○雨○起居も多用あり
中にも○月○梟○耳○口のごとき○目○のごとも
○足のごとしはくわくれ事語あれい異新例の
まねるべきなるべきとまちまちなるべし

おしなべて態藝の字よりも屋押復用の類を詞
いきとしほ古式と一二とつゝ折を分てを四と
字をむ〳〵こゝの詞字ハ面を如て八と字をむへ
七白とひるるとひらるの字をを論ずるに及
ずして折と如く表とゆるくいるゆるゆるて
〳〵もを今選まるれはしを作て論ずるに及
ずして世界とあゆゆ詞字の類市を我とまる
〳〵れい市をを折と如て字を類をを面
とをりて八と字あ千文百字の惑ふくれ
の字類とん例とを例て必とし用とをて

をを付をを此変とををもんとも

○ 尤可キニ不審スベキ事

おを我中古の式用を論ずるに中一に連誂の
用と石用をとををを中人を連辛に難詞の
あとををのひ中二ををの形房をををして
滑稽に諧笑の和をををるをるを今の俳諧の
認をを重屋のをひあるるを也れを中より
不審をを〳〵ばをを者を述懐をを表八白
に嫌〳〵を「初の形を嫌ゝををやをるを彼に

[illegible]所あるべきと命じ給ふとて速懐とあり親子
[illegible]きてを速懐あるべしとこれをば何なる
殆いかゝ或は稲妻電光と天象は嫌ふべし
[illegible]鳥鶴の格をもれてあるべきとて[illegible]
[illegible]嫌ふべきとも所の竈と所不[illegible]
例の不用[illegible]やはり所[illegible]やはりあるべき命て推量
もべきうとて船をとゝきとゝて[illegible]
不審のまゝ用ゐるべきやいかゝ[illegible]
[illegible]やはれ[illegible]中まも俗馬乗のはたを秋能清の
は用ゐるべきと論をとゝ不審をくるべきとて

いふ所[illegible]物況ふとて書きて挿おくあるべきや
蓋況ふを秋もあるべきはまれもあるべきあり
櫻人況ふとをまの事よと拾て挿おくべきあり
人偏も二百ばかりの同宗の況おくべき色の
ちひあるべきをもひこのめ及ばあるべき道
[illegible]一貫のはあるべん或は況の書を降おくべきて
況の所を降おくあるべきとゝるべき仏事の如歌も
不審あるべしけれのねより調をさして我家
の用ゐるけれいをもて論をるべきもとなるべん
[illegible]況を秋とゝるべきに妻性の書をるべ

あんもんをさきとして秋は姿をあらそはず
ておもての所ちるをやまとうれの下をとゝれ
いろ枯をるをありとひいてまれもおかしとする
あるをもとゝめちらひあるをてれをを不審の不審
とやいはむ但をもおとを看破して不埒不埒の說
とやいはむ或を「摺るを雜」とをれを「掠るを
多論」をて「雲泥を」「豆腐」をまつ実をとゝめる
名あんもん論あり秋海棠を一名或八花傘と
「知るの」を論を世を言おを冬ををれを紹巴
を同ふて奥儀をををれをて師ををの弟子

し新説をして知るの知をとをを字を連歌を面を
きゝ八能説をを折を蟬をを何ねを計一字の
連歌をををを歌京ををををを能説也
歌話ををれをの名れををひをもれい冬を雜
を也論をも及をて也て也説の是を八不審
へ不審の説ををて古おの説をををををきを
但を考を速懐をあを摺るを秋歌をありを
古おの説ををををくきを一社の家説を一世也
実議を此説の用ををふへき色返ををくを此式の
をを儒仏神の三家を今の五説のはを出

とて詩号連俳をもてはいて世界の人は皆
まうふをもとゝへい古式をあけてもてき
もとゝるかきし秋ありとゝるがゝ天文地理の
はかりも次を秋ありの暗を表ふりとあれいもの
ゝ人のゝも調もあやまりれと学而不思殆
とゝる論語の誡もゝれ事也ゝて音時の
俳諧師よ国の書屋のもてゝさら色王猫の
目はもてゝかきし論あり秋ゝ字てゝれを
例の自然もゝ八ゝ花懐の嚢中を作ゝ
あをれい古式をもてくゝれゝて宗匠もて

いとはくゝむのかあり宗とは古人の誡ゝは
道とゝるをれいはをもて道を損をゝる一歩
ゝるの変とおゝる一一今選もゝ中古れ
式より月花ゝ歌ゝ不ゝあゝてはれい雑や
ゝもゝ手也と月と天象ゝあゝもゝ花と
雑和ゝあゝもゝ草竜ゝる雅ゝ一一
と百色ゝ百不のゝゝあれい一中二知の
ゝも及ゝてかゝゝては式ゝもゝゝ人おゝん
きゝい俳諧のもゝ今事ゝ一万ゝ一如の花
ゝもゝゝより俳ゝ儒門の歌意ゝるゝ之ゝ

し八百の威儀し道を一貫せはてるとさとむら
唐土の道生は仰ぐ所ある人とあるねもの
論より世間の人まあきむられて果を奥山に
ひきぬ蔵り石とあり何ぞ
仰ぎて二尊あん素皆成仏の一段ありとて
世二世とのはを設の人頑石ちかく距はを
へ垂迹をまあきむるを古はをもりをはを
ををひ百おるるし和をを一拳百通ありを
をれりはねを我ふ中像をねるの千言百語を
ふりてはを一段のねとをれをも諸や家くは

書を信をを今をを書ありをを
はりを中像の高檐人をして仏法を今日の和
をあるひて事語をあつふあれい連仏の
仏法をかつをを九の家議をを

○曽不及論物ふく事

ちらく仏法の始をあるへいられのはり連ぞは
頂国をを果の仏法所りを八年を愚名
ををれ鄙境和言の始口をまれて天地
己角の虚空ををけるり清稽のををを加

ゑて猶のねをのこしひきてそれを洒落と
名付けあらはせる連歌の名式なり〳〵を
あげまの人を京詞にしたがへ馬を鼠とうそ
ぶくく今の俳諧の言行をくみ用のはたのこ
おりをんれをれる中より例をひらく▲雪を露に
附句を蝶にとりなして万葉をひら
れをれ今を附るも所ねをもこれの論
もなくいねも或を▲樣を新あり也とむさし
てをまちをりをもひ花のをいをくをもをのん
あるを所あるいまをあるいとをもを何ねを

付樣のをかく念の入るや或を▲蓮の実に雨も
蓮を花とをもを実をおもをみを蓮肉と
あつけて茶椀を作るをあるを新あるいれ也を何を
樣和をなるをを百を新をとをもを新也とをもを傳
の海歌を念の入るをて藤人を法をふをとく
俳諧をんかりて害あるんをを揚もむ
を孫をねを新あるんをを揚をを揚もむ
い千竹も一方本もを命をて也或を▲樣本の秘文を
松を紙ををて例のをて▲をを所の類説を制方をく
のをあり附を今は俳諧ををなをあり或い▲鼻紙

のたぐひ花のすがたもうつり所あり〳〵ゆゑにあり
来たりとてこれを今の例のものくるあれども今此式目の所用あれ
ども是れは此論の一條を尋ぬるとて子〳〵これ
をむしり此諸と今此例諸とおのすゝそゝ人
あり〳〵二かたの中中といと此一條ゆゑ先んとのべ也

○文字穿鑿のく事

そもゝより俳諧の席に色くの名目あり文字
穿鑿の事あれと月の○雪ちらす花の○恋
ちらすとてまけに向ふ及ぶ時は○世ありう
○風ありうをもるくゝよりあれと来絲の物を
とも配する時は指をもてるとかんちゝ各用
いるさはりもさらんこれを物のさしあむ
へきすもそれとも○増ゝ○庭ゝこれはたを
市傘ゝを駿ゝてゝの用のはたあれと我門の
大和詞ゝ真名をもて一字一用と定て千文
万字もまもられねと要とをりぜゝ庭場の
差ゝをぬあれとこゝ子一用の和訓を称れそ
我門の書ゝ庭字とみハと訓を一く場字い

だて訓をしたるは字文の識伊達を叱咤
をうるをもむるを也勳をたてをこしの義なりとつと
秋名の馬もてるかをさもあやまりなる故よいねをせ
物して今の世をくるをたの和の手語に風雅をたけ
て詩笑の和あをつむとをれを爾雅の爾海の
正語をなをさんけいねをけ性を墨を海を城を
陣ををうて馬をよ伊ひをを歯を衣をを出せ
をを右おを新を右を敵を手を竟を今を挑諧
を耳を文の宮ちんをうををれをを也をを今を
鳴の下を○鳴をかい性をりをもみの海をを

ふを也をををををかををををいをてををりの海をを
ふをををを人ををををををををををををを
ゆをを海の海を大海ををををををををを
のををふ波れのをを潮れの海をを形容
ををを山時を伝のをををををををををを
名跡を称を或を○海を字を の変を聲を海の字を
り字の誤をり曝布の布の字を字を字を字を例の
を編ををり但や曝を字を老人の誤を瀑を
を泉懸れをあり海を字を曝(サラス)布(ヲ)と訓て
海をを人の形容を海のをを義訓

ならん大和に此れとよめむ時ハ一字ごとに片假名
を付へきや八うき正譌をあらためて日本一致
に埒のあかすし馬と鳥と訓するとも今日の用
に達すへきや儒家に書數の字向をならすとも
俳諧も人和のあそびなるんとや或ハ○詠の字ハ
釈文に口よりいふを用ゐるとも同訓異字ハ訪穏
なれハ式目に例のまとひありまえに之ハ和哥も
連哥も此字の訓を分ぬなりねや詠も詩哥も
此なりて永言(ナガムル ヲ)といふ字訓やまさるれハ詠の字も
古今の字よして咏嘆といふ時も詞をふく蔵とも

して千秋をかぞふる歌のあやなり佛家の和讃に
節をはかりしこれらの咏吟といへる也とするに
同訓異字といふも用ふるになるなるハ盼(ハンノ)字を用ひ
なかむるハ詠(エイ)字を用へし盼ハ説文に
流視の字訓ありてなかめの古訓あり盼(ナカシメニミル)と注し
詩なるハ睨字をも訓せしもとすなるハ盼(ナカムル)花といひ
詠(ナカムル)花といふ兩點なれハニツヲの副假名にて義分きて
通しちて説文の義といふを詠(ナカメスル)の略
まて盼ハ流視(ナカシミル)の略なる左右にてんおくる義
ありそれをよしとせそれ之ハ我翁の和歌とて

と假名と真名とに通をはれい哀連めゆ
やうひより箱(ハシク)檜といひ函飴(アメク)とつる同訓の
穿聲をもちふ(う)るとて年論のるめ中ふ
○齡とふ字は穿聲をもち傘一部めもち文ふて
建治應安の兩式ともに日本國の字近達と
筆て書ふ(う)ふ文弁ふてかふ(う)こふ微細の雜詞あれ
いふ(う)も微細の雜詞をもへ一字論を例の世用
あふ(う)筆(スサミ)石を文の優游とふ(う)へ傘(カサ)に曰齡
のことをもはそもちはるふ年のふ但和の七十八十を
不可嫌(ストヲ)ふ(う)これ新式のお越を嫌ふおのふふ

ありそれ新式を悟学は名近達のお用く事合
て年ひふ(う)く穿聲をふされ今その力ともて
はおふ(う)も胃おふ(う)をもあふ(う)ふとおふ(う)りと一條
ふ感深とふ(う)ふ結ふされと一ケ條を龍め
はをはをとをいふむ文をふるふ及ふるふや
文ふ合五ふ(う)ふこふをもはそもちとふ(う)ふ年字
をこ白ふ(う)ふひふをふをふふ(う)ふ附を不可嫌(ストヲ)とし
いふ(う)ちめふふ年の文字あふ(う)ふとふ(う)ふ(う)ふ(う)ふれふ
年稔歳千これ(う)のふ(う)はふふもちのおいへ
おふ(う)ふ(う)ふを古人の誤ふ(う)ふ(う)ふ(う)ふと云ふ(う)ふ今名ふ新式へ

ミクシ 三十年 ヨワシ 四十年 ナラフ 七十 ヤワ 八十 まで 嫌 きく答 ありと 相応 ず 分ね
せ ちるとちゝ。 是 假名 たゝひいゝとゝぢ
とい かゝ ね ゝ ゝ やゝ ちゝ ゝ 老人 の 自作 自述
あんをゞと 決 て ソシ 十年 の 二字 あん 傘 に 連 ゝ
の 懐帝 あゝ に ヨワ 四十 ゝ ヨワ と ヨワ ヨワ 年
イワ 四十 年 ゝ ちあゝ ひ 作 ゝ と 何 ん あゝ 人 の 齢 の 時 ゝ
ゝ ち い ゝ ち と て ふ 時 し 年 の ゝ と ゝ ゝ る ね と ん ね
て 年 ゝ ゝ と ち 加 ゝ て 辭 ず と て ふ ん た ゝ て 人 の
齢 の 四十 ゝ ゝ ゝ ち い ゝ ち と て ふ 時 い ゝ ゝ の

字 あり ゝ ゝ ゝ 人 の 八十 八 ゝ ゝ る と 米 年 と い ふ
ゝ ゝ 四十 ゝ ゝ る 人 を 四十 の 字 ゝ ゝ る と ゝ 四十 ゝ ゝ る
人 を 四十 の 字 ゝ ゝ る 人 を 四十 の 字 ゝ ゝ る と ゝ ん も ち れ い。 ゝ ゝ 字
を ち ま ゝ ゝ ん ね る ゝ ゝ ゝ る ゝ ね ゝ ち の 字 と ち
あ や ま れ り と ゝ 今 日 答 ゝ 叶 ゝ を 文 所 ゝ 言 と 言
あ り て 其 の お ゝ ゝ ゝ か ゝ ま れ い あ り く い 言 ゝ 中略
ち り ち て 一 ゝ の 米 竟 ち を ゝ 四十 字 ゝ 四十 字 と ち ま
ゝ ま る あ れ ゝ 米 字 と ゝ ふ 時 ゝ 八十 八 ゝ の ゝ ゝ か ゝ ひ
て 八十 八 字 の 年 と て ゝ ふ 一 ま ゝ や ゝ ち の 有 ゝ ち ち
か ゝ ゝ ま る と 俳 す め ゝ ゝ 字 ゝ と 侍 若 所 人 ゝ ゝ 雖 ま

奉に曰たてまつる序よりこの十一字は此歌集の
ことちあるべしとおもはるるよりやうて歌集の
賀の詞書よりはそちの賀七そちの賀あるて年の
とをとてあるとをとをそのかへあるそれ賀とゆるくき
ねよりはそちの賀七そちの賀とて名月に始れる
を人の齢の時を賀あるてそちとてとくねて
ことをいそとてとてとらそちとてとからりも
ありとをりとてに新式の時らさく不礼事
あれい天下の誤とてあれりと云今答よは一説の
ことを年竟を年のらさあるよそちとよをは

両釈ありされとをたてまつる賀の賀ことを四年賀とも
七十賀ともあれとそちとて假名附いあるさく
歌書をいあるよちねあるいはは十の賀七十の賀
といはて何のゆるくきてるあんそちとく後撰
も假名はそひもけをいを人の自作自述あんいをを
新式の正説をそんちとく押もて天下はあやまり
とを駟馬もおひかてき過言あるをや奉に曰
千載の誤もあるとあされいはれね指合よあいて
ようをるのあるねをあるけよあれい自今はね洮ふい
年のらさ嫌ふとそちめをとをてみをを改めい

みなのうようなる事しと云こと今はなをけ法の用を
新式の年の字と拵て法華の字はそなと用よと
ありされて新式の年の字を遁れて今はなを
とせむとて法華の法華の字はそなるこけられ
てよきなの指合もなをんこれと紛潛よ
八頻頻といひて世間の俗語よりてはけ
以下をぬらくと例よ古風の昇下自慢也今選
まりに雑答の年意をそなちをこ十年はを訓
器よりて禪師とひはを師とふ撥ちよと渡りに
をれあれて障よりとひ菓よりひ和訓を

これての俗語ありて美と大和の神秘とをて
なをとひ苔おれ江神のもありとも法学の自慢よ
俗語をまを(うて次きられは論の俗まる不へ
法華の字よりあるを新式の字
あれい齢の三十年四年三年の字を嫌の若
あり物の和七十八十八十三年の字は嫌の若也
と新式の叮嚀とをもむしかくのごとくかくの
ごとを例よ故義の接記おうこは有てに
けんとおよをよちうを潛よ実とをあをてみを
紛潛を虚とをまをくをを字殿を言語の

誹義も咄ましく談笑の遊びとして世俗の人和の
用あれハしみな此方の俳諧とするなし

○宗々に秘傳之事

むかしより和歌にも連歌にも宗々の秘傳あり
て哲言鉄血割の附法およそハ中比の俳諧にもおほく
和歌し連歌よりきたりて彼を秘し是を傳へたと
今此俳諧にいたりても入たるもまりなき手談
ともあまた法よりなる物あれハ人の宗ねハ俳諧にあるまじ
とてきあるくあやしき名目を一殊にするによって

されハをぬ也折しもや傘の不婢と評されし事される
秋されの秋文にさとて口傳の詞にて古あり ハ古来
きて表なれハ秋あれにしかねよし歌書先達
もかくとれり也趣の歌書の詞を信じひたる初て
去実の義をあらはされし也とそりてひあるへ
あやの詞を皆く催をはじけハ信へからすと
かなし然してあまれハ秋あれへし実らいあり俳
と中今なを本まされも秋されし連歌に此
用あれハ詞は一ときはあらわしる時といひ
俳ひとつまて俳諧の日用ちかるより俗語の訓義

を語りて一一去るべき物の果とつゝ夕去るべき方
をつゝ去るべき方をつけねどけ詞を変へ
夕部にゆつりていまだ用ゐる人多れ果あれ
いと変されも多くされも多く皆也変と俳諧の誹
とまるべ一或べ夕才暮北秋文けれ北子い作
作の秘するもおろ〳〵く書代に作べき人あるべく
まべ自讃なりとも拾て捨べ作作のいられ
いあ一いべべやけに不おたちなり北大秘するべ
百世の人とやとい世るべ変やや秘していねいたるす
あ〳〵秘のべまりて人のまべまべ人のあるよ

相のべ〳〵式用の用るべあるべさあり今あ俳諧
の曲節べべけ詞とかるべめちひい夕号暮まて
時めあけへむつりき一百葉俳名のかのまと
用るに及べ〳〵んれべべや作傘の秘すると俗べべ鶏
鳴部るれ北下べ北るあり北れべべ文あ〳〵ねいられべ
べべの秘するあるねべ変べ変べ変べ新式べ新
べべれべべべむう北連べ作い歌べ北いべべ
べべすと変べ〳〵れべ〳〵べけ拾て人とあるべて
秘方の作べとひべあ秘べ変べべて人とべべべべむ
べべ論べい式用の宣べべべて一べむ北べやや

法華のおろそかなるをば法華経と朝ちゝけの釈みを形式
と非れ和合僧と載せられたる既に多のまあり何
何の疑あるてう二条殿の法華経をあるてやを
おのつから有ちゝけを開のまゝてハヒフ(ホ)ヘ又ハ
和通ありとそう今ゝそふ形式のことをは式
凡例もまるうおとふを時合うてあるを和
ふへおかあるうちゝ有れいせくの連歌作のはを
まゝと時合とひおをめてとおかゝの歌の例
ゝあゝむゝ新式ゝ百世の惑とひんゝてあるう
あるとそれとも有ちゝけを非れ和合とて不相世

四つ

詞とあらゝて老者をとん
もを世ゝ二条家の内もたかゝとおれ不覚の
放言うして新式一部を老者をのはたあんや
変よおそる(きゝ)我ゝ子孫もかくまてゝ人の非と
あくれいゝ人ゝ(きゝ)秘非とゝあはたんや一世の異議
とおそる(きゝ)そをもれ子孫も有て家世
ゝるゝ天下ゝ結ゝ和
ゝるゝ各用をあけて稽業の下ゝいひ相れ
しゝはてゝゝる世文言ゝ拙和の稽ゝこの内をけゝる
のゝ名世ゝ字ゝを稽のゝあゝれゝ右のゝとく

き嬢ふうよきくありうとを例の我のごとくをりて
例のんとやとはさむるや「百千寿の秘文」百千
のるとし百千をるとは百千をぬあれと文也
それ字とをとしとそをりとは百千やとし例のまとは
とをや嗔をるは釈文を風雅のふけく〳〵き放埒
をて淫清の憂名をしけはをりといふむはをてをの
文言しはをるはをとは百千をあれは修接をね人を
むをとをねをりありと近代の連弟作は制をれ
と他清をは修接ををとをも正統とをとをとも来
のをるとに嗔をるありとんねてをとしをを怪る

をりあをを連弟をは一百あれとをのをるをは
あれは言るをとしとをれをるは馬鹿(てくり)をり
をんあくは金一部の放言ををををる
花咲の秘をは今を疑はをを式用とをれり
物ををを秘をのはをを或をねをを或は
あををを我ををつれををいをるをり一世のねは
世用とをををるは言語をるのはををはをを
かくのをとくかくのををきををを角をねを者の笑言也
之四者ををはんとを家をを
おををくをの秘接秘傳をはをを家をくのはを

うての秘伝と云謂あれいたるまで仏家
にも秘密不定の二教あれと秘密とは白いとも
黒いとも云ねの法とあり此ねと秘するに一枝の
花とさしけの人に迦葉を微笑(ニツコ)とおもいれまれ
一に貫之北道を胸臆(ニケ)の唯乃(アツ)にとひ来る
のに忠恕の答を通辭して酸とも甘とも
そねのはたあり中古のおもかげ達の
説諧の式目とえてねとて歌の秘事を
あらわれや秘授をあくめ寄帳とて
毛一一あらわれい我宗の説諧なる古とまきて

今とは古むとつの一刀両断の代語をもて代来
一部の秘訣とあるい説諧の部を仏
とおもいむくとも説破まるるはあらん深や
なる秘すとあるなるを及ぶとも言ても説
然識ん通の場ていて秘伝くとをいつあり
一一あらわれとは仏秘とあるを儒説は
あるを我義のはおるに東湖南の人を對する
りねの事説をもて新故のをひを
もりはあれと中古を説諧の名をとして古義と
説一古老と新をれい血とねくして人をくる

えそのロとけもてとねるあめさ前るへゆうされな
まうさあれ〳〵我家ふるへ飛鳥ゝ古人あるとつる
千条一斬の秘訓ありて百世ゝ天下の古流と
唯断されい今北中條さ言ひ部のつきうひまて
論さるも敬祝の耳をとるゝ似〳〵ほきに知
天道の順あるは飛鳥のるとまて儒門のまる
北調よりも賛〳〵て六芸の媒とあさるい源家
〳〵史記の伝文あるとやきれい飛鳥と飛鳥と
い各おの家あれい他門の式目といふ法まさん
あ〳〵〳〵貞享北とうえ禄のそ〳〵ちまてし

京家さ北〳〵飛鳥の名さ作〳〵こ世ゝ世の門と
加中〳〵て書はおゝ式目とさるに今北武洛の
家匠家まてれおゝこ中余おもあ〳〵ゝ
とめ〳〵長沢老人の伝傘とまて洛鶴とあれ
い飛鳥も飛鳥はおあ〳〵ほたとあるてまてに
我門の古老ゝ流ゝ流ゝ北面をゝ〳〵
おゝ〳〵ゝゝまてねる春の遺誡ゝ八ゝ〳〵中余年
とゝとゝさて飛鳥の歌賀さ作〳〵かゝくてゝこと
ゝゝい調とゝうかゝる古風の附方ゝ流ゝ〳〵あん
とねる春さ例の二ゝ中ゝ〳〵ゝ北れの遺誡

と識文ゝゝあるをりゝ宮ゝおいて我宗も驕奢
領下此之をかゝきて世間あるも性をひろそむき
そゝゝ行人の大任あゝゝもやはりあゝゝ今の僧侶
の我ゝゝまりて我とおゝそゝてきゝて儒仏を兼
此宗義と宮ゝゝ法歌連歌の花弱とおもむ
ゝゝまれいをのつゝゝ過書の詞ゝはのりて花ゝう
酒屋の内借ゝも仏ゝゝゝい高邁虚誕の浮名
ゝゝあゝゝ一々むゝゝゝゝゝゝ根義のつゝもるゝ
てゝゝゝゝ行人のはゝゝゝむゝあり我ゝゝまりて
ゝゝゝゝゝゝゝ僧侶一名のゝゝ絶して我ゝゝ

まりて勇ゝおゝゝあゝゝ世間ゝゝ人倫の人和ゝゝ也
おゝれゝ儒仏の内秘ゝゝ僧侶のゝ現ゝゝゝゝ
あれいゝ以者ゝゝに遺令を疑ゝて古をもゝきて
今をはゝまむゝゝゝ一月兩断のはゝ語を看破て
此十條の結文ゝまゝへ秘ゝて秘ゝて一ゝゝゝゝ
此一語あるべゝ

十箇條月之口絶